

## 環境過敏症分科会 2022 年度活動報告

北條祥子<sup>1)2)</sup> 水越厚史<sup>3)</sup> 黒岩義之<sup>4)5)</sup>

- 1) 東北大学大学院歯学研究科 2) 尚絅学院大学  
3) 近畿大学医学部環境医学・行動科学教室  
4) 帝京大学医学部附属溝口病院脳神経内科・脳卒中センター 5) 財務省

## Report of the Environmental Sensitivity Subspecialty Meeting (2022)

Sachiko Hojo<sup>1)2)</sup> Atsushi Mizukoshi<sup>3)</sup> Yoshiyuki Kuroiwa<sup>4)5)</sup>

- 1) Tohoku University Graduate School of Dentistry 2) Shohei Gakuin University  
3) Department of Environmental Medicine and Behavioral Science, Kindai University Faculty of Medicine  
4) Department of Neurology and Stroke Center, Teikyo University School of Medicine, Mizonokuchi Hospital  
5) Ministry of Finance

---

### 【分科会設立の背景と目的】

近年、先進国を中心に、環境過敏症（環境不耐症）と呼ばれる健康障害を訴える人が急増しており、早急な病態解明や予防対策が求められている。環境過敏症とは通常では問題にならないような身の回りの微量な化学物質（室内空気汚染物質・受動喫煙・医薬品・殺虫剤・芳香剤・柔軟剤等）、生物的要因（カビ、ダニ、花粉、ウイルス等）、物理的要因（音、光、地震、低気圧、パソコン・スマホ・MRI 装置等からの電磁場など）により、多器官に多彩な症状が現れる健康障害の総称である。その代表例はシックハウス症候群、化学物質過敏症、電磁過敏症であり、アレルギー疾患と密接に関係していることはよく知られている。しかし、本症は種々の要因の複合的な影響で発症すると推定され、その病態は科学的に未解明な部分が多い。日本臨床環境医学会環境過敏症分科会（以下、本分科会）の目的は国内外の研究者と共同研究や情報交換を行いながら、環境過敏症の科学的に未解明な病態を解明し、診断基準の確立、治療法・予防法の確立をめざすことにある。（本分科会は室内環境医学会の環境過敏症分科会と協力体制を組んでいるが、両分科会はそれぞれの母体学会の特色を生かしながら活動している。現在、本分科会では“環境過敏症の病態解明、診断基準と有効な治療法の開発”を主として検討し、室内環境学会環境過敏症分科会では、“室内環境改善などの発症予防法の確立や認知度を高めるための活動”を主として検討している。）

### 【2022 年度の活動】

1. メーリングリストを介して、日常的に共同研究や最新知見の情報交換・情報共有を行った。
2. 第 30 回日本臨床環境医学会学術集会では、本分科会のメンバーが、特別講演 2 演題（相澤好治先生、吉野 博先生）および 33 の一般演題を発表した。
3. 第 30 回日本臨床環境医学会学術集会時の活動  
第 1 部「石川 哲先生の思い出と今後の会の発展を語る会」と第 2 部「台湾建築医学学会との交流会」を開催した（写真 1，写真 2）。  
日時：2022 年 6 月 25 日（土）18：00-20：00  
場所：工学院大学新宿キャンパス

企画・司会進行：北條祥子、黒岩義之、水越厚史、柳沢幸雄

参加者：42名（現地参加26名、オンライン参加16名（日本11名、台湾5名）

<内容>

第1部では、吉野 博先生の司会で、石川 哲先生の御冥福を祈り1分間、黙祷した。その後、石川 哲先生と親交が深かった宮田幹夫先生、吉野 博先生、柳沢幸雄先生、小倉英郎先生、上田 厚先生、黒岩義之先生が、石川 哲先生の思い出を話された。宮田幹夫先生から「石川 哲先生は暗いことがお嫌いだったので、偲ぶ会でなく、本分科会の今後の発展を明るく語る会にしましょう」とのご提案があった。そこで、記念写真を撮影後、参加者全員が、一言ずつ、「石川 哲先生との思い出」、および、「石川 哲先生の御遺志を引き継ぎ、環境過敏症の病態解明や発症予防法を確立するために、今後、どのように研究活動をしたらよいか」について、率直に語り合う、明るく楽しい会となった（写真1）。



写真1

第2部では、柳沢幸雄先生が座長となり英語で会を進行し、オンライン参加の台湾建築医学会5名の研究者と日本の参加者（37名）が交流した（写真2）。

まず、黄 嘯谷先生（台湾建築医学学会名誉理事長）が「第30回臨床環境医学会学術集会では、喘息の発症と環境要因との関係について、医師、疫学研究者、建築学の黄 琳琳博士など幅広い研究分野の研究者が行った学際的研究の結果を一部、発表した。台湾研究者は、今後も日本の学会で発表し、日本の研究者との交流を推進していきたい。」と挨拶された。

次いで張 智元先生（台湾建築医学学会理事長）と黄 琳琳先生（台湾建築医学学会事務局長）が「台湾建築医学学会は台湾でも比較的新しい分野の学会で、そのメンバーは、土木、建築、環境工学、IT研究者、医師など幅広い研究者で構成されている。台湾建築医学学会ではアメリカのジョンズ・ホプキンス大学の医学部教授でもある黄 嘯谷先生が医学と公衆衛生の分野を指導して下さっている。医学以外の分野（建築、環境科学、情報、ITとかAIなど）は私たちが中心に指導している。将来的には、工学の立場から患者の治療にも関与したいと考えている。日本からの研究者も台湾建築医学会学術集会に参加して、研究発表をしていただければうれしい。」と話された。

これらの台湾の研究者からの話題提供を受け、会場の日本からの参加者（柳沢幸雄先生、吉野博先生、寺田良一先生、平久美子先生、黒岩義之先生など）との間で、「今後の日本と台湾の研究協力の進め方について」、率直で活発な質疑応答が行われた。来年度も台湾から、2022年室内環境学会学術大会や第31回日本臨床環境医学会学術集会に参加して、日本の研究者との協力関係を一層、発展させたい。日本からも台湾建築医学学会学術集会に参加するなどの相互交流を深めていくことを誓い合った（写真2）。



写真2

#### 4. 2022年室内環境学会学術大会での活動

本分科会と“室内環境学会環境過敏症分科会”との共催で、「セミナー：With コロナ時代に環境過敏症にならないために出来ることは？—マルチ異分野の研究者からの提言」を開催し、11名が話題提供すると同時に、一般演題発表（ポスター・口頭）も行った。（写真3）。

日時：2022年12月1日9：45-11：15

場所：江戸川総合文化センター小会議室

企画・司会進行：北條祥子、黒岩義之、柳沢幸雄

参加者：35名（現地25名、オンライン10名）

<内容>

来賓として台湾の黄 嘯谷先生（台湾建築医学学会名誉理事長）が挨拶した後に、以下の11名が、順次、話題提供した。その後、会場の参加者と総合討論を行い、最後に集合写真を撮影した。その後、11名は一般演題発表（ポスター・口頭）も行った。

- ①北條祥子（東北大学大学院歯学研究科）「環境過敏症患者の現状と今後の展望（疫学研究者として）」、
- ②黒岩義之（帝京大学医学部附属溝口病院）「環境と医学の接点（脳神経内科学研究者として）」、
- ③山中隆夫（独・行政法人国立相模原病院）「睡眠障害と環境過敏症（睡眠科学研究者として）」、
- ④中里直美（元・国際医療福祉大学熱海病院薬剤部）「薬剤師の調査から学んだ脳脊髄液減少症の環境過敏反応（薬剤師として）」、
- ⑤鈴木高弘（横浜薬科大学）「脳脊髄液減少症に伴う電磁過敏反応に関する症例報告20例（薬学研究者として）」、
- ⑥水越厚史（近畿大学医学部）「環境過敏症の発症予防とバリアフリー（疫学研究者として）」、
- ⑦浦野真弥（有・環境資源システム総合研究所）「香料製品の適切な利用を考える（環境工学研究者として）」、
- ⑧上田 厚（NPO 法人アジアヘルスプロモーションネットワークセンター）「環境過敏症患者のエコロジカルな生活スタイルに学ぶ（社会医学研究者として）」、
- ⑨\*黄 琳琳（台湾正修科技大学）「可視化による地下居室における気流環境設計方法（建築学研究者として）」、
- ⑩許 媛婷（台湾国立公衆衛生院）「台湾の住宅における室内環境と空気質の学際的な調査（公衆衛生学研究者として）」、
- ⑪柳沢幸雄（東京大学）「予防原則に基づく環境過敏症対策（環境学研究者として）」





写真3

5. 台湾研究者との交流会（第1部、第2部、第3部）を開催した（写真4）

共催：室内環境学会環境過敏症分科会

日時：2022年12月1日、第1部 11:15-12:15、第2部 13:00-14:00

第3部 17:45-19:30

場所：江戸川総合文化センター和室

企画・司会進行：北條祥子、黄琳琳

参加者：15名（台湾5名、日本10名）

<内容>

第1部では、セミナー終了後に残れるメンバーが隣の和室に移動してセミナーの審議の続きを行った。その後、ポスター発表者はポスター会場に移動して、各自、発表ポスターの前で質疑応答に応じた。第2部では、ポスター発表後に和室に戻り、皆で昼の会食後に意見交換を行った。第3部では、大会の国際シンポジウム終了後に、柳宇先生や東賢一先生も参加し、今後の国際協力について意見交換を行った。



写真4

【分科会メンバー（アイウエオ、ABC 順）◎代表、○副代表、\*幹事】

<医学・医療分野>

1) 日本：相澤好治（北里大学）、青木真一（秋田県協和町歯科診療所）、東 賢一（関西福祉科学大学）、石竹達也（久留米大学医学部）、五十嵐公英（東松島成瀬歯科診療所）、井上博之（宮城県保険医協会）、上田 厚（NPO 法人アジアヘルスプロモーションネットワークセンター）、内山巖雄（京都大学名誉教授）、大澤 稔（東北大学医学系研究科漢方医・統合医療学講座）、奥村二郎（近畿大学医学部環境医学・行動科学教室）、小倉英郎（独・国立病院機構高知病院）、角田和彦（かくたこどもアレルギークリニック）、加藤貴彦（熊本大学医学部大学院生命科学研究部環境社会医学）、○黒岩義之（帝京大学医学部附属溝口病院脳神経内科）、小橋 元（独協医科大学）、近藤哲哉（関西医療大学附属診療所心療内科）、坂部 貢（千葉大学予防医学センター）、篠永正道（平塚ふれあいホスピタル脳神経外科）、\*鈴木高弘（横浜薬科大学）、鈴木珠水（独協医科大学看護学部）、平久美子（東京女子医科大学附属足立医療センター麻酔科）、高塚俊治（岡山市駅前歯科診療所）、高野裕久（京都先端科学大学国際学術研究院）、田村澄江（日本女子薬剤師会）、出村 守（札幌でむら小児科クリニック）、東門田誠一（尚絅学院大学）、土器屋美貴子（佐賀大学医学部）、\*中里直美（元・国際医療福祉大学薬剤部）、中吉隆之（関西医療大学保健医療学部）、西影京子（よこはまにしかげ小児科・アレルギー科）、\*乳井美和子（前）そよ風クリニック）、春山康夫（独協医科大学先端医科総合研究施設）、平井利明（帝京大学医学部附属溝口病院脳神経内科）、◎北條祥子（東北大学大学院歯学研究科）、松井孝子（国立障害者リハビリテーションセンター病院）、○水越厚史（近畿大学医学部環境医学・行動科学教室）、宮田幹夫（そよ風クリニック）、山口みほ（元・久留米大学）、横田俊平（横浜市立大学名誉教授、湘南よこた医院）、吉田貴彦（旭川医科大学）、山崎明夫（京橋クリニック）、山中隆夫（独・行政法人国立相模原病院）、盧 溪（熊本大学大学院生命科学研究部環境生命科学講座公衆衛生学講座）、渡井健太郎（湘南鎌倉総合病院免疫・アレルギーセンター）

2. 台湾：陳 力振 Li-Chen Chen (Taiwan New Taipei Municipal Tu Cheng Hospital), 黃 嘯谷 Shau-Ku Huang (National Health Research Institutes), 蘇 庭耀 Ting-Yao Su (National Health Research Institutes), 許 媛婷 Yuan-Ting Hsu (National Health Research Institutes)

<建築・生物学・化学・物理学・工学・社会科学分野>

1. 日本：池田耕一（元・日本大学医学部）、岩崎由美子（総合地球環境研究所）、上田昌文（NPO 法人市民科学研究所）、浦野真弥（有・環境資源システム総合研究所）、大塚健司（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、加藤やすこ（いのち環境ネットワーク）、川瀬晃弘（東洋大学経済学部）、木村-黒田純子（環境脳神経科学情報センター）、近藤加代子（九州大学大学院芸術工学研究所環境・社会環境デザイン講座）、菅原正則（宮城教育大学）、関根嘉香（東海大学理学部化学科）、寺田良一（明治大学）、\*徳村雅弘（静岡県立大学食品栄養科学部）、永吉雅人（新潟県立看護大学）、二科妃里（東北文化学園大学）、長谷川麻子（宮城学院女子大学）、羽根邦夫（羽根産業技術株式会社）、林 基哉（北海道大学）、萬羽郁子（東京学芸大学）、星野陽子（足利市立北郷小学校）、柳沢幸雄（東京大学名誉教授）、\*柳田徹郎（東京大学大学院工学研究科都市工学）、吉野博（東北大学名誉教授）

2. 台湾：張 智元 Chih Yuan Chang (Taiwan Society of Architectural Medicine; Feng Chia University Department of Civil Engineering, Taiwan), \*黃 琳琳 Lin-Lin Haung (Department of Architecture and Interior Design, College of Engineering, Cheng Shiu University, Taiwan)